



## 日本菌学会会長に選出されて

日本菌学会会長 畑井喜司雄  
(平成15年度～16年度)

この度会員皆様のご推挙により平成15年度～16年度の日本菌学会会長に選出されました。今回の会長は、財政的に大変厳しい会の運営状況の中でいかに財政を立直し、健全な運営を確立するかが求められているかと思えます。その責務の重さを考えますと、会長を引受けるべきか大いに躊躇しましたが、誰かが会長となり日本菌学会の発展に寄与しなければなりません。熟慮した結果、微力ではありますが全力で取組むことを決心いたしました。

日本菌学会は、これまで順調に発展し、昨年までMycoscienceを年6回、日本菌学会会報を年4回刊行してきましたが、今年から、Mycoscienceを年6回、日本菌学会会報を年2回、ニュースレターを年4回刊行することになりました。会員の皆様からの積極的な投稿をお願いする次第です。また、ニュースレターは気軽に読み、情報交換の場としても利用していただける会誌を目指しています。これらの会誌刊行の財源は、会費収入に加え、Mycoscienceは日本学術振興会からの科学研究費補助金(研究成果公開促進費)に支えられてきました。しかし平成14年度はこの補助金が不採択となり、Mycoscienceの刊行が危ぶまれる状況に陥りました。幸い、昨年はCD-ROMの販売が好評であったことや事業の独立採算制、国際シンポジウムの開催による繰入金等により補助金不採択による収入減を補うことができ、従来と同じ事業を行い、且つ支出の削減で結果的に余剰を出すことができました。

平成15年度は、幸いにも研究成果公開促進費の内定を受けることができましたが、この補助金が今後恒常的に交付される保証はありません。このような状況下で今期理事会は、補助金の採択・不採択によって揺り動かされずに会誌刊行が継続でき、且つ各種の事業が実行できる財政基盤を作ることが重要であるとの結論に至りました。会誌の刊行は本会の学術研究・教育普及活動の基盤となる事業であります。特にMycoscienceにつきましても、質的向上に努めて国際的な評価の得られる会誌になるよう万全を尽くすとともに、今後も研究成果公開促進費が得られるよう努力してまいります。

このような事情から、まず、今期理事会は、前期理事会ならびに評議員会における審議結果を継承し、本会事業の根幹である会報の刊行および他の各種事業を遂行するための財政基盤を確立する方策について審議検討を重ねました。その結果会費の値上げをせざるを得ないとの結論に達し、今年の年次大会の評議員会に提案し、十分な質疑応答で審議を行い、満場一致で会費値上げ案の承認を得た上で、総会に諮り承認されました。会員の皆様には、財政的なご負担をお掛けすることになります。会員の皆様には、財政的なご負担をお掛けすることになります。本理事会は、会費値上げに甘んじることなく、財務内容を改善するための増収や節約対策に向けて具体的に検討いたします。菌学研究を職業にするか否かに拘らず、本会の目的に賛同されて入会された全ての会員に満足していただけるよう、広く会員からの要望を受け入れるための努力を重ねていきたいと考えております。

ところで本会は、平成18年に設立50周年を迎えます。このために本理事会では日本菌学会50周年記念事業実行委員会を立上げる準備をしております。その事業の一環として平成17年8月に日本菌学会の年次大会も兼ねる「日米菌学会合同大会」をハワイで開催する予定にしておりますが、これは、すでに杉山純多実行委員長のもとで実行委員会が組織され活動を開始する準備が整いました。多くの会員に参加していただきたいと祈念いたします。また、同様に日本菌学会50周年記念事業の一環として取組むことになった「日本菌学史」は、宇田川俊一委員長のもとで編纂が進んでおります。さらに日本菌学会としてグッズを作成し、各種大会などで販売することも考えております。しかし、日本菌学会50周年記念事業をどのような形で進めるにせよ会員皆様のご協力なくしては成功させることはできません。日本菌学会に関係している皆様方のご協力を重ねてお願いする次第です。

以上、会長就任にあたり現状とこれから本学会として取組まなければならない課題などを述べさせていただきました。皆様のご支援、ご鞭撻をお願いしましてご挨拶と致します。

## 2003・2004年度の日本菌学会について

前会長 畑井喜司雄

2003・2004年度の会長の任期も2005年3月末で終了しました。この2年間は、通常の理事会運営に加え、多くのことがありました。特に前理事会では、2002年度の科学研究費補助金（研究成果促進費）が不採択となり、その後も採択されなかった場合には、数年で学会運営が危ぶまれる状態となることが予測されました。しかし、幸いにもCD-ROMの販売が好調であったこと、国際シンポジウムの開催による繰入金があったことで、補助金不採択による収入減を補うことができました。しかし、依然として今後の日本菌学会の運営が危ぶまれたため、「日本菌学会振興基金」を設立して募金することを考えたのですが、会員から承認等を得なかったことから不成立のまま我々の理事会に引き継がれました。このような状況で発足した理事会であったため、当初は財政立て直しが当面の懸案事項でありました。このため、最初の評議員会・総会では会費の2,000円値上げ案を提示し、幸いにも承認していただきました。さらに2003年度は科研費も採択されたことから、「日本菌学会振興基金」を設立しなくても学会運営が可能との見通しを立てることが出来ました。しかし、科研費は今後も採択される保証はないことから、後述するような手段を取り入れ、科研費を当てにしない学会運営を構築する努力を行いました。現に、2004年度の科研費は不採択でありました。すなわち、経費軽減の一貫として、事務局を庶務担当大学に移すこと、学会誌の印刷頁や発行部数を減らすことを行いました。また、会員サービスとして、年4回のニュースレターの発刊およびホームページの充実などに取組みましたが、両担当者の努力のおかげで、情報提供量が増え、会員には満足してもらえらる内容になったものと思っています。このため日本菌学会報は年4回から2回の刊行となりましたが、英文誌Mycoscienceはこれまで通り、Springerから年6回刊行することが出来ました。

我々の理事会では、日本菌学会50周年記念事業実行委員会を発足させることも重要な課題で、私が実行委員長となりその企画などに取組みました。特に、記念事業を

成功させるためには募金を集めることが重要と考え、その趣意書などを作成してお願いしていますが、まだ募金目標額には達していません。記念事業を成功させるためには今後も会員の方々のご協力が必要であります。記念事業の先陣を切り、今年8月に日米菌学会合同大会（日本菌学会第49回大会を兼ねる）がハワイで開催されます。関係者の方々の努力や企画により、多くの日本人が参加することで、大会が成功することは間違いないと確信しています。

2004年8月には日本菌学会の会員管理などを委託していた「日本学会事務センター」が突然倒産しました。このため日本学会事務センターの財産はすべて保全管理人によって管理されることになりました。また会誌発送を請負っていた会社も同様に倒産となり、会誌の発送も停止してしまいました。学会事務センター側から説明・弁明がありましたが納得できるものではありませんでした。幸い日本菌学会は会費を一定期間毎に日本菌学会の通帳に移していたこともあり、大きな被害を受けずに済みました。全財産を失った学会もあり、説明会での罵声は大変なものでした。本学会では直ちに会員に通告し、学会事務センターへ会費を送付しないよう連絡したため被害を最小に止めることが出来ました。その後、保全管理人から各学会に会員名簿などを含む資料類の返還や保管されていたバックナンバーの引取りが日時を限定して通達されました。このため庶務担当は多忙を極めました。現在は、委託せずに庶務担当により会員管理や会誌の発送が暫定的に行われています。

最後に、会計担当の努力により、毎年繰越金をわずかながら増加できたこと、庶務担当は、学会事務センターの倒産にもかかわらず、学会業務を適確に運営してくれたこと、各編集担当の努力で予定通りの出版ができたこと、集会担当による企画もつつがなく実行されたことなど、これらは力量不足の会長を補佐してくれた副会長、各理事および幹事の方々の努力・協力によるものであると感謝しております。この場を借りて御礼申し上げます。